

『楞伽經』の「自心現」と『慧可語録』

常盤義伸

一 楞伽經四卷本における「自心現」の用例 分析

『楞伽經』四卷本に見られる、この経独自の用語「自心現」120例を、梵文、漢訳、に和訳を添えて表を作成し順に番号を付してみると、各巻におけるこの用語の分布状況は次の通りであることが知られる。

I: Nos. 1 ~ 45 (45); II: Nos. 46 ~ 73 (28); III: Nos. 74 ~ 111 (38); IV: Nos. 112 ~ 120 (9)

120例の全体をここに紹介する余裕はないので、全体を、「自心現」を知らないはあいと知るばあいとに二分し、代表的な用例を各々11例と40例に絞り、簡単な見出しを添えて以下に示す。これによって、この用語が『楞伽經』において占める位置と役割とを多少でも明らかにすることができればと考える。各用例の冒頭の数字は、私のこの用例表1~120の番号である。

なお、梵文は、南条校訂本 (Z) を四巻本のグナバドラによる漢訳に基づいてそれに近い形に還元した私の私家版 (Lankavatara Ratna Sūtram) によっているので、該当する箇所の方々のページ数を示す (例: L [Division] 11, [p.] 40; N [p.] 44, [p.] 4)。漢訳は大正新修大藏経による (例: T [p.] 484a, [L] 11-12)。

「一」対象として知覚されているものが自心の現れであることを知らないばあいの用例

眼識を含む前五識と、意識、そしてマナ識は、それぞれが第八アーヤ識を因とし対象とすることを知らずにアーヤ識に依存する、と云われ（用例 15' 16' 112' 116'）

そのアーヤ識が、ここに「自心」と云われている。（72' 73'）

七識のそれぞれが、その知覚に対して知覚せられる対象を別にもつという意味で、対象性をその習性とする。このことは換言すれば、七識は一異、有無、自他、生滅、あるいは四句分別と云われる意識の立場を守るということであり（56' 90'）

七識は、その習性の限界が見えない限り、実在の真相すなわち「自心現」に無知だ（89'）

そして七識にとってアーヤ識は無知の依りどころであり続ける（72' 73'）

そのような七識の対象としての仏陀に出会うならば、菩薩は無漏の三解脱門、空・無相・無願、でもってその対象性を徹底して打ち砕くべきだ、と『楞伽經』の仏陀は云う（76'）。

これが、以下の用例の大体の主旨である。

15. *caturbhir* ∴ *kāraṇaiś caksurvijānam pravaratate* / ∴ *yaduta svacitadṛṣya-grahanāvabodhato 'nadhikāla-prapañca-dauṣṭhyā-rūpa-vāsanābhiniवेशato vijāna-prakṛti-svabhāvato vicitra-rūpa-lakṣaṇa-kautūhalataḥ* /

四因縁故眼識転 ∴ 謂自心現摂受不覚。無始虚偽過色習氣計著、識性自性、欲見種々色相。

(L11, 40: N44, 4: T484a, 11-12)

「見る」という識知の働きは四つの理由で起る。すなわち、自分が外のものとして捉えているものは自心がそのよう

に現れていることを覚らないこと、無始時来抜がり続けている誤った、形の習慣性、に囚われていること、識知そのものの本性、および、*やまやま*の特定の形への好奇心、による。」

16. na ca teṣāṃ (pañcānāṃ vijñānakāyaṅāṃ) tasya (manovijñānasya) caivam bhavati vāyam atrānyonya-hetukāḥ
svacitta-dṛśya-vikalpābhīniveśa-pravṛttā iti //

彼不作是念、我展轉相囚、自心現妄想計著転。

(L11, 41: N44, 19: T484a, 21-22)

「しかもそれら(五つの識知)にも、そしてそれ(意識)にも、『我々はここで互いに相手を囚とするものであり、自心に他ならない対象を外のものとして分別し囚われて生じているのだ』という考えは起らない。」

112. tadanyāni vijñānāny utpannāpavargāni mano-manovijñāna-prabhr̥tīni kṣaṇikāni sapṭāny abhūta-parikalpa-hetu-
janita-vicitra-viśaya-saṃsthānākṛti-viśeṣāvalambīni nāma-nimittābhīniviśāni *svacittadṛśya-rūpa-lakṣaṇānavabodhakāni*
sukha-duḥkhāpṛatisamvedakāny amokṣa-kāraṇāni nāma-nimitta-paryvutthāna-rāga-janita-janaka-tadd-hetv-
ālambanāni /

其諸余識、有生有滅、意識等、念念有七、因不実妄想、取諸境界種々形処、計著名相、不覺自心所現色相、不覺苦樂、不至解脫。名相諸纏貪生、生貪、若因若攀緣。

(L112, 318: N221, 1-7: T510b, 10-14)

「他の識別力は生じ滅する。それらは自我意識、意識など、みな刹那的で、すべてで七つ数えられる。それらは虚妄な分別に依って起き、様々の無数の形・姿の対象に執着する。それらは名と特徴とに執着する。それらは自心が形・色の特徴として現れていることを覚らない。それらは苦悩と幸福とを認識せず、解脫の因となることがない。名と特徴とへの執着から起きる激しい欲望によって生じるそれら七識は、欲望を引き起こす直接、間接の因となる。」

116. pañca-vijñāna-kāyās citta-mano-manovijñāna-sahitāḥ kuśalākusāla-lakṣaṇa-parāṃparā-bheda-bhinnāḥ samtati-prabandhanābhinna-sārīrāḥ pravartamānāḥ pravartante / pravṛtya ca vinasyanti svacittadṛśya-anavabohātī samanantara-nirodhe 'nyad vijñānaṃ pravartate samsthānākṛti-viśeṣa-grāhakaṃ manovijñānaṃ pañcabhir vijñāna-kāyāḥ saha sampravuktam pravartate / kṣaṇakālanavashāyī tat kṣaṇikam iti vadāmi /

五識身者、心意意識俱、善不善相展転変壞、相統流注不壞身生、亦生亦滅、不覺自心現、次第滅、余識生。形相差別摂受。意識、五識俱相應生、刹那時不住、名為刹那。

(L117, 341; N235, 9-15; T512b, 8-12)

「五識の識別能力の集まりは、心、自我意識、意識、とともに、善または不善の特徴が次々と変化し崩壊しながら、全体としては崩壊しない一体のものとして持続して起きる。生じた後、それらは完全に失われる。外の対象として現れているものが自心に外ならないことを覚らないために、一つの識別能力が止んだ後すぐに別の識別能力が起きる。形、種類、区別を知覚するものとして、意識は五種の識別能力の集まりと一緒に起きるが、一刹那も留まらない。そのことを私は刹那的と言ふ。」

72. abhina-sārīra-lakṣaṇam ālayavijñāna-hetvālabhanam svacittadṛśya-visayābhiniśeṣe citta-kalāpāḥ pravartate 'nyonya-hetukah /

不壞身相、藏識因攀緣、自心現境界計著心聚生、展轉相因。

(L81, 167; N127, 2-4; T496a, 25-26)

「八識は」不可分離の一体として、根本識を因とし対象とする心の塊で、それが、自心の現れとしての対象に囚われることから發生する。ここでは相互に相手を因とする関係にある。」

73. udadhi-taraṅga iva. svacittadṛśya-visaya-pavanēritāḥ pravartante nīvartante ca /

譬如海浪、自心現境界風吹、若生若滅、如是。

(L81, 167; N127, 4-5; T496a, 27-28)

「あたかも大海の波浪のように、自心が見られるものとして現れている対象という風に激しく吹かれて「八識の全体が」生じたり滅したりする。」

76. *svasāmānya-bāhya-svachīdāśya-mātrānavabodhakānām ...saptānām vijñāna-kāyānām vimoksa-traya-anāsraya-duṣṭa-*

vikāpenātyantōpāghātāt tat-saptavidha-vijñāna-buddhasya tathāgata-kāye duṣṭa-citta-rudhirōtpāda ity ucyate /
不覺外自共相自心現量七識身、以三解脫無漏惡想究竟斷彼七種識仏、名為惡心出仏身血。

(L86, 187-188; N138, 18 - N139, 2; T498a, 24-27)

「特殊と普遍との特徴をもつて外の世界として現れているものが自心に外ならぬことを覚らない七つの識別作用の集まりに対して、無漏の三つの解脫〔空、無相、無願〕という悪意に満ちた選択をすることによって徹底して打ち砕くので、その七識の「仏陀」について、如来の身体に出血を起こすと云われる。」

78. *svasāmānya-lakṣaṇa-dīpti-patīśāyāḥ svachīdāśya-mātram na pratijñānam apratijñānād bāhya-bhāvānitya-darśanāt*
ksana-paramparā-bheda-bhinnāni skandha-dhātṷ-āyatānāni samlati-prabandhena pravṛtya vinivartanta ity akṣara-
[dṛaya-lakṣaṇa-rahitāni pravīkalyapayan punar api vaināśiko bhavati ..

墮自共相見希望、不知自心現量、見外性無常刹那展轉壞、陰界入相統流注變滅、離文字相妄想、是名壞者。

(L91, 199-200; N146, 14 - N147, 1; T499b, 6-8)

「〔虚無論者は〕自分が特殊と普遍との特徴を固定する見解に陥り、現れているものが自心に外ならず独自の存在性をもたないことを覚らない。このことを覚らないために、そしてまた外界に存在するものを無常だと見るために、刹那ごとに部分に分裂し続ける、5、12、あるいは18の人間の構成要素が不断の持続をもつて起り、そして生滅す

る、というふうには、文字の相を離れたものを妄想し続け、重ねて自ら虚無論者であることを立証する。」

56. *anādikāla-tīrthya-prapañca-vāda-vāsanābhiniṣṭā ekatvānyatvāsītiva-nāsītiva-vādan abhiniṣante svacittāḥṣya-mānānavadhāritā-matayaḥ /*

如是外道、無始虚偽習氣計著、依於一異俱不俱有無非有非無常無常見、不能了知自心現量。

(L53 117: N90, 17: T491a, 14-16)

「見える世界について非仏教者たちの無始時來の主張の影響を受ける人々は、一異、有無の立場に囚われて、自心が対象として現れているのに外ならないことを覺らずに、ものを考える人たちである。」

90. *bāla-prthagjanā anādikāla-prapañca-dausthulya-svaprativikalpanā-nātake nṛtyantaḥ svasiddhānta-naya-deśanāyān akusālāḥ svacittāḥṣya-bāhya-bhāva-lakṣaṇābhiniṣṭā upāya-deśanā-pāṭham abhiniṣante na svasiddhānta-nayan cātuskotiḥka-naya-vīsuddham prativibhāvayanti /*

愚癡凡夫、無始虚偽悪邪妄想之所廻轉、廻轉時自宗通及説通不善了知、著自心現外性相故、著方便説、於自宗四句清淨通相不善分別。

(L101, 238-239; N171, 10-14; T503a, 11-14)

「無知者・普通の人々は、無始時來増幅する粗惡な自己分別の踊りを踊り続けており、自分の最も重要な目的である宗教と、そして教説と、をよく知らず、自心の現れである外の特徴に執着して、方便にすぎない教説を誦誦することに囚われて、自分の宗教である、四句分別に依る在り方を離れたところを徹底して考慮することがない。」

89. *ātmanīya-lakṣaṇa-grāhābhiniṣṭābhiniṣṭāḥ svacittāḥṣya-mānānavabodhī jñānam jñeyam prativikalpayanti /*

我我所相撰受計著、不覺自心現量、於智爾炎而起妄想。

(L100, 237; N170, 16 - N171, 1; T503a, 1-2)

「自己と自己の所有という特徴を捉えてそれに執着し、自心を対象として見ているにほかならないことを覚らないために、知が知の対象を知ると分別する。」

「二」対象として知覚されているものが自心の現れであることを知っている場合の用例

アーラヤ識は、身、財、そして身と財との成立の場、として現れる、と云われ、それが「自心現」という表現の由来をなすこと(8)、自心の現れである対象(「外」)には内と外の両方がともに「外」として含まれること(6、7、9)、が知られる。

三界が心の現れだと覚えることは般若波羅蜜に住することである。自心に他ならないことを覚って対象性を離れるからである(10、120、20)。

自心の現われを実体として分別し対象性に執着する過ちを離れたものは、対象性に捉えられる傾向性、自心現流をよく見て取ることがができる(17、18)。そのことを確認したいものは、人との接触を避け、分別の虚妄な在り方を熟知すべきだ(21、22)。

対象が自心の現われに他ならないことを説くものは「法依仏」(37)、自心現の対象性を離れたものは「法仏」(38)と云われる。

自心現の対象に存在性はなく、従って対象は存在としては不生である(41)。

菩薩の修行は、自心現を確認することを中心とする四種の内容からなる(46、47、49、50)。この菩薩は仏乗の種性である(60)。

内外の知覚がなくなる三昧の成就が自心現を覚る境地を超えることはない。三昧も自心現に含まれるから(67、

68)。滅尽定は自心現を覺る境地には存在しない(69)。

菩薩は修行の第3、4、5地で三昧の樂を正受する意からなる身、意生身、を得て前七識はすべて第八アーラヤ識に収まり、第八地において如幻三昧の意生身を得、そのあとすべての仏陀と共通の無行作の意生身を得ると云われる(74、75)。これらはいわゆる三昧の經驗とは異なり、出入がない。ここで云われる意生身とは、誓願の成就に没頭する菩薩の在り方を形容する言葉である。

自心現において対象を見ず、三解脱門を経て、知ることさえも得られない(87、93～95)ことが、仏教で云う涅槃である(96、97)。

仏陀は人々に真理を説いて人々が心・意・意識から離れるように仕向けるが、人々を自覺聖智に入らせることはしない。これは、各自が自心現を覺ることを通して自証することである(100)。

仏陀は知覺の対象が自心の現れであることを覺っているので分別意識が起らず、世間は落ち着いて無事である(101、102)。

菩薩は修行の初地から七地までにおいて知覺の対象が自心の現れに他ならない(＝自心現量)こと、無知者はしかしそれに囚われることを止めない(自心現流)こと、を、よく觀察する(105)。

修行の段階として仏陀が設定するものは、実は便宜的なもので固定したのではなく、それも自心現に他ならない(106)。

出世間上々波羅蜜とは、自心現量を覺り分別が起きず生死への執着も起きないものが、人々に安樂を与える目的で、与えるという修行の完成が生じることである(117、118、119)。自心現を覺ることは、智慧の修行の完成である(120再)。

以下に、その本文を上の説明の順に引用する。

6. 7. *advāyāma-bāhva-cittatīśya-vikalpanādhikāla-prapañca-darsanena svacitta-vikalpa-pratyaya-vinivṛty-arahitāh*

見：内外心現妄想無始虚偽、不離自心妄想因縁滅尽。

(L10, 37; N42, 3; T483c, 12-14)

「内と外が心の現われで妄想であり無始時の虚妄な抜がりだと見る。この洞察によって彼らは自心を分別する条件をなくすることに事欠くことはない。」

9. *adhyaṃma-bāhya-viśaya-vimuktatayā citta-bāhyādarśanatoṣā animitthādisihanānugatā*

遠離内外境界、心外無所見、次第隨入無相処。(L10, 38, 2-3; N42, 10-11; T483c, 20-21)

「内または外の対象性を離れており、心の外に見られるものはないことを覚ることになる。このあと彼らは無相という在り方に入る。」

8. *deha-bhoga-pratiśtābhāsālayavijñāna-viśaya-grāhya-grāhaka-visamnyuktam nirābhāsa-gocaram utpāda-sthiti-bhāga-varjyam svacittopādānugalam vibhāvavaiśyanti*

受用建立身之蔵識、於識境摂受及摂受者不相応、無所有境界、離生住滅、自心起隨入分別。

(L10, 37; N42, 6; T483c, 15-17)

「彼らは、知覚の対象について、それらが身体、その享受の対象、それらのための場所としてのアーラヤ識の現れであって、執着されるものと執着するものとの因われから離れており、現れたものの虚妄性を離れていること、また生じ住し滅するという在り方を離れており、生起することはすべて自心からであることを、確認するでしょう。」

10. *svacittadīśya-nirābhāsavātanena prajñāpāramitā-vihārānuprāptā*

度自心現無所有、得住般若波羅蜜。(L10, 39; N43, 9; T483c, 23)

「彼らは「三界が」現れの虚妄性を超えてそれが自心に外ならないことを覚り、したがって空慧(般若)の究極に住するにいたる。」

120. tatra yadā svacitta-vikalpābhāvād ābuddhi-pravicayāt prativicinvaṇṇ antadvaye na pataty āśraya-parāvṛtti-pūrvakam avināśataḥ svapratyātmārya-gatiṃ pratilabhate sā prajñā-paramitā /
 自心妄想非性、智慧觀察不墮二辺、先身転勝而不可壊、得自覚聖趣、是般若波羅蜜。
 (L118, 344; N238, 48; T512c.11-13)
 「そこにおいては自心を虚妄に分別することがなく、知力でもっていくら検討吟味していつても二辺に陥ることがなく、依りどころの転換はその後失われることがなく、自内証の尊い方方を達成する。それが智慧（般若）の修行の完成である。」

17, 18. anyatra bhūmi-lakṣaṇa-prajñā-jāna-kausalā-pada-prebhedā-viniścaya-jinānanta-kuśala-mūḍopacaya-svacittadṛśya-vikalpa-prapañca-virahitair vanḷa-gaḥana-guṇjalāyāntarगतair mahāmate hīnōkṛṣṭa-madhyama-yoga-yogibhiḥ na śakyam svacitta-vikalpa-dṛśya-dhāra draṣṭum :

余、地相智慧巧便、分別決断句義、最勝無辺善根成熟、離自心現妄想虚偽、冥坐山林下中上修、能見自心妄想流注。 (L11, 42; N45, 11-13; T484b, 2-3)

「しかし、菩薩の修行の段階の特色と空慧と智とに通じ、「百八」句の一つについてしっかりと決着がついており、勝者の下で無量の善根を積み、自心を外の世界として分別することの拡がりを離れており、森「や洞窟の隠れ家」に隠れて上中下の修行を行っている人を除いて、自心が分別されて外の世界として現れる激しい流れを覚えることができるものは、なご。」

21, 22. bodhisattvena svacittadṛśya-grāhya-grāhaka-vikalpa-gocaram parijñātu-kāmena saṃganikā-saṃsarga-middha-nivarana-vigatena bhavitavyam / prathamā-madhyama-pāścād-rātra-jāgarikāyogam anuyuktena bhavitavyam / ku-ūrthyā-śāstrākhyāyikā-śrāvaka-pratyekabuddha-yāna-lakṣaṇa-virahitena ca bhavitavyam / svacittadṛśya-vikalpa-

lakṣaṇa-gaṅgātena ca bhāvivyāṇaṃ bodhisattvena mahāsattvena //

若菩薩摩訶薩欲知自心現量攝受及攝受者妄想境界、當離群聚習俗睡眠、初中後夜常自覺悟修行方便、當離惡見經論言說及諸聲聞緣覺乘相、當通達自心現妄想之相。

(L12, 49:50; N49, 6:12; T485a, 10:14)

「自心が対象として現れ捉えられるものと捉えるものという分別が行われる境界を徹底して知りたいと思う優れた菩薩は、社会との接触と怠惰との妨げを避けるべきだ。夜は初夜、中夜、後夜と常に目覚めて自己集中に没頭すべきだ。また悪い非仏教者の論書や物語類、および声聞と独覚との乗り物をも離れるべきで、自心が対象として現れるものを外のものとして分別するという特徴に徹底して通じるべきだ。」

20. *nā-rakta-prākāraṃ hi tarāṅgeṣu na vidyate / vṛttis ca varṇyate cittam lakṣaṇārthan hi bālīśān //* *na tasya vidyate vṛttīḥ svacittam grāhya-varjitam / grāhye nāsti hi vai grāhyas tarāṅgaṇi saha sādhyate //*

青赤諸雜色 波浪悉無有 起來相說心 開悟諸凡夫。

彼業諸無有 自心所撰離 所撰無所撰 與彼波浪同。

(L11, 45, 1, k.105, k.106; N47, 5; T484c, 1 ~ 4)

「青、赤、等の色は波の中にはない。生起しているのは心だとの説明は無知者たちに分からせるため。そこに生起することはない、自心は捉えようがないから。捉えられたものに実体がないことこそ、波にも当てはまることなのだ。」

37. *dharma-tā-niṣyanda-buddhaḥ svasāmānya-lakṣaṇa-patitām sarva-dharmām svacittadṛśya-vāsana-hetu-lakṣaṇaṇibaddhām parikalpita-svabhāvābhiniवेशa-hetukān atad-ātmaka-vividha-māyā-vaicitrya-abhiniवेशanupalabdhīṃ ... deśayati //*

法依仏、説一切法人自相共相、自心現習氣因相統、因妄想自性計著、種々無実幻種々計著不可得。

(L17, 60; N56, 10-16; T486a, 18-20)

「覺の真理の流出としての「大乘の」仏陀は全て何かであるものが特殊と普遍との特徴に割当られていること、自心を対象として分別する習慣性が執着されてその分別の原因となつてゐること、そしてこういうことが現実の虚妄に分別妄想された在り方への囚われによつて引き起こされてゐること、しかし実在しないさまさまの幻の多様な愛着の対象が捉へる（このできない性質をもつものである）ことを、教える。」

38. dharmatā-buddhah ...nirālamba ālamba-vigatam sarva-kriyendriya-pramāṇa-lakṣaṇa-viniṣṭtam avisaṃyam bala-śrāvaka-pratyekabuddha-tīrthakartmaka-lakṣaṇa-abhiniveśābhiniṣṭānām pratyātmārya-niṣṭhā-viśeṣa-lakṣaṇām vyavasthāpayati / tasmāt tarhi... pratyātmārya-gati-viśeṣa-lakṣaṇe yogah karāṇīyah / svacitta-lakṣaṇa-dīpīya-viniṣṭi-dīpīnā ca te bhavīyām /

法仏者、離攀緣、離所緣、一切所作根量相滅、非諸凡夫声聞緣覺外道計著我相所著境界、自覺聖究竟差別相建立。是故、∴自覺聖差別相当勤修學、自心現見应当除滅。

(L17, 62; N57, 13 - 58, 1; T486b, 1-5)

「覺の真理そのものである仏陀は、依るべき対象をもたず、対象化されることを離れており、すべての所作、知覚器官、認識能力、の対象としての特徴を離れており、自分固有の特徴に愛着をもつ無知者、声聞、独覺、非仏教者たちの境界ではない、自内証の優れた特徴の究極の在り方を建立する。それゆえ君は、自内証の境界の優れた特徴の区分に修行を集中して、自心を対象として分別する見解をなくしなければならぬ。」

41. svacittadīpīya-bhāvābhāvāi sadasator uṣṣṭi-virahitavān ...anupannāḥ sarva-bhāvāḥ śāsa-haya-viśāṇa-tulyā...sarva-dharmāḥ

自心現性非性、離有非有生故。∴一切性不生、一切法如兔馬等角。

(L20, 68; N62, 8-10; T486c, 29 - 487a, 2)

「外のものとして現れているものは自心であって外のものとしては存在せず、有と無とから生じることを離れているので、…兎、馬、の角に等しく、すべての存在は生じていない。」

46. *caturbhir ... dharmaih samanvāgata bodhisattvā mahāyoga-yogino bhavanti / ... yaduta svacitadṛṣya-vibhāvanatayā ca bahya-bhāvābhāvōpalakṣanatayā ca utpāda-sthiti-bhāga-dṛṣṭi-vivarjanatayā ca sva-pratyātmarā-jñānādhiḡamābhiramanatayā ca /*

菩薩摩訶薩 成就四法、得修行者大方便。…謂善分別自心現、觀外性非性、離生住滅見、

得自覺聖智善樂。(L39, 100; N79, 13 - N80, 2; T489b, 26-29)

「菩薩たちは、四種の条件を備えれば優れた修行を实践する人となる。すなわち1。自心が対象となっていることはつきりと確かめる、2。外の存在はないことを観察する、3。生住滅という固定した見解を離れる、4。自覺聖智の証得をよるつきりとある。」

47, 48, 49. *kaṭham . bodhisattvo mahāsattvaḥ svacitadṛṣya-vibhāvanā-kaśalo bhavati / yaduta sa evam pratyavekṣate citamātram idam traidhānukam ātmānīya-rahitam nirāham āyūha-niryūha-vigatam anādikāla-prapañca-dausthulya-vāsanābhinivēśa-vāsitam traidhātuka-vicitra-rūpōpacāra-upanibaddham deha-bhoga-pratiṣṭhā-gati-vikalpānugatam vikalpyate khyāyate ca / evam hi... bodhisattvo mahāsattvaḥ svacitadṛṣya-vibhāvanā-kaśalo bhavati //*

云何菩薩摩訶薩善分別自心現。謂如是觀三界唯心分齊、離我我所、無動搖、離去來、無始虛偽習氣所薰、三界種々色行繫縛。身財建立妄想隨入現。是名菩薩摩訶薩善分別自心現。

(L40, 100-101; N80, 6-12; T489c, 1-5)

「優れた菩薩は、自心が対象として現れていることを、どのようにしてはつきりと確かめるのかといえは、彼は次

のように観察する。心に他ならない此の三界は自己と自己のものであることを離れており、動きがなく、努力と努力を放棄することとを絶しているが、無始時來の分別の拡がりの粗悪な習慣性に囚われることに影響されて、三界のさまざまな物質的な奉仕に執着している。それに続いて、身体と享受の対象とそれらのための場所との存在を固定的なものとして捉える分別が生じる。「三界はこうして」分別された対象として現れる、と。優れた菩薩はこのように、自心が対象として現れることをはっきりと確かめることができる。」

50. *svacittamānusāriṅvād bāhya-bhāvābhāva-darśanaḍ vijnānaḍam apravṛtiḍm dṛṣṭvā pratyayānaḍm akūṭa-rāṣṭvāḍm ca vikalpa-pratyayōdbhavaḍm traidhātukam paśyanta ḍhyātṛa-bāhya-sarva-dharma-anupalabdhībhīr niṣvabhāva-darśanaḍ utpāda-dṛṣṭi-viniṛyittaḍm māyāḍi-dharma-svabhāvānuḍgama-anutpatika-dharma-kṣantaḍm pratīabhaṭe /*

隨入自心分齊故、見外性非性、見識不生、及緣不積聚、見妄想緣生、於三界内外一切法不可得、見離自性、生見悉滅、知如幻等諸法自性、得無生法忍。

(L42, 101-102; N80, 15 - N81, 3; T489c, 10-14)

「自心に外ならないことに徹底するので、外の存在がないことを見て取り、したがって識別能力がどれも起らないこと、知覚の対象が塊の分量ではないこと、を見て、三界が分別の対象化から起ることを観察する。彼は、内にも外にもすべて何かであるものを把握することがないので、無自性を洞察し、「ものが実体として因から」生じるという固定した見解を離れる。そこにおいて彼は、すべてのものの自性が幻などに似ることを知り、何かであるものが不生だという洞察を得て、生住滅の固定した見解を離れる。」

60. *svacittadṛṣṭya-mānāvabodhāḍḍ bāhya-bhāvābhāva-vikalpanatayāvikalpyamānaḍ buddha-yāna-gotra-āvaḍā bhavati*

覺自心現量、外性非性不妄想相、起仏乘種性。 (L62, 140; N108, 3-5; T 493c, 3-4)

「自心が対象として現れているに過ぎないことを覚るので外の有と無とを分別するという習性に依って分別がなさ

れないとき、仏陀の乗り物という種性をもたらす。」

67, 68. *samjñā-vedīta-nirodha-samāpatīś ca...svacittadīśya-gaī-nyatikramas kasvā na yujyate citamāravatī //*

受想正定超自心現者、不然。何以故。有心量故。(L77, 160; N121, 9-11; T495b, 14-15)

「自己集中において内的・外的な知覚の滅尽が達成されることが、外の世界として現れているものは自心に外ならないという覺りを超出することはない。滅尽定も、なお心に外ならないから。」

74, 75. *tri-caturtha-pañcamyām bhūmanu svacitta-vivāha-viveka-vihāreṇa citōdadhi-pravṛtī-taraṅga-vijñāna-lakṣaṇaṃ samādhi-sukha-samāpatī-manaso 'pravṛtīḥ svacittadīśya-viśaya-bhāvābhāva-parijñānāī samādhi-sukha-samāpatī-manomayah kāya ity ucyate/*

第三第四第五地三昧樂正受故、種々自心寂靜安住、心海起浪識相不生、知自心現境界性非性、是名三昧樂正受意生身。(L85, 184; N136, 11-15; T497c, 8-10)

「菩薩修行の第三、第四、第五の段階において意は、自心の現れに外ならない多様さへの囚われを離れて落ち着き、心という海に起きる波に等しい識別の働きの相が自己集中の喜びの成就した意には起らない。これは意が自心の現れである対象が有を離れていることをよく知るからで、これが、自己集中の喜びの成就という意から成る身体、といわれる。」

87. *svacittadīśya-mātrāvabodhāī sadasato bāhya-bhāvābhāvāī jñānam apy arthaṃ nōpalabhate tad anupalambhāī jñāna-jñeyayor apravṛtīr vimokṣa-trayānugamāī jñānasāpy anupalabdhīh /*

覺自心現量、有無有外性非性、智而事不得。不得故、智於爾炎不生、順三解脫、智亦不得。(L100, 237; N170, 10-13; T502c, 25-27)

「自心が対象として見られているのに外ならないことを覺るので、有であれ無であれ外の存在がないので、知は対

象を見出さない。対象を見出さないで、知ることが知られることと一緒に起きることがない。三解脱に達するので、知る（こと）の（こと）も得られなく。」

91. svasiddhānta-rayāḥ ...katamo yena yogināḥ svacittadṣya-vikalpa-vyāvṛtīṇ karvaṇi yaduta ekatvānyatvōbhaya-vānubhayatva-paksāpatanam citta-mano-manovijñānātītam svapratyāmārya-gaṇi-gocarāṇa hetu-yukti-dīpī-lakṣaṇa-vinivṛttam anāhīḥam sarva-kutārīkaiś tīrthakara-śrāvaka-pratyekabuddha-yānikair nāstyasitvāntadvaya-patītais tam ahaṃ svasiddhānta-naya-dharma-īi vadāmi /

自宗通者、謂修行者離自心現種々妄想、謂不墮一異俱不俱品、超度一切心意意識、自覺聖境、離因成見相、一切外道声聞緣覺墮二辺者所不能知、我説是名自宗通法。

(L101, 240; N172, 9-14; T503a, 21-25)

「自分自身の宗致として確立された原理とは、それによって修行者が自心の現れである対象を虚妄に分別することから離れるもの、すなわち、一、異、一と異と、一でも異でもない、という四句の辺に陥らず、心と意と意識とを超え、聖者の自覚の境界で、論理的な理由、推理、固定した見解、を離れており、有と無との二辺に陥っている非仏教者、声聞、独覚の乗り物で行く誤った推理論者たちに味わわれることのないもの、それを私は自分自身の宗致という原理の示す真理だという。」

93, 94, 95. bāhya-bhāvānabhiniveśāt svacittadṣya-nātrāvasthānād dvīdhā-vṛttīno 'pravṛtter vikalpasya nimitta-gocarābhāvāt svacittadṣya-nātrāvabodhanāi svacittadṣya-vikalpo na pravartate / apravṛtti-vikalpasya animitta-śūnyatāpranīta-vimokṣa-traya-vatārāṇa mukta ity ucyate //

不計著外性非性、自心現処二辺妄想所不能転、相境非性、覺自心現、則自心現妄想不生。妄想不生者、空無相無作、入三解脱、名為解脱。(L102, 244-245; N176, 2-7; T503c, 6-9)

「外の有にも無にも執着せず、外の対象とされるものが自心の現れに外ならないところにおり、二として動く分別が起らず、何ら外的な姿に依ることがなく、外の対象は自心の現れに外ならないことを覚っておれば、自心の現れである対象に対して分別が起らない。分別的な思考の起らない人は、解脱していると云われる。無相、空、無願の三解脱に入っているから。」

96. 97. mat-pravacane nirvāṇam ity ucyate katamad yaduta svacitadīśya-mātrāvabodhad balya-bhāva-anabhivēśāc catuskoika-rahita-yathabhūtāvasthana-darśanāt svacitadīśya-vikalpasvāntadaya-apalanatayā grāhya-grāhaka-anupalabdheṣ sarva-pramāṅgāpravṛtti-darśanāt tattva-vyāmoham agrahaṅyatvāt tad-vyudāsāt svapratyūtmārya-dharmādhigamān nairātmya-dvayāvabodhāt kleśa-dvaya-vinivṛtter āvaraṇa-dvaya-viśuddhatvāc cyuti-dvaya-vigamād bhūmy-uttarōttara-tathāgata-bhūmi-māyādi-viśva-samādhi-citta-mano-manovijñāna-vyāvṛtter idaṃ nirvāṇam iti mayōcyate /

如我所說涅槃者、謂善覺知自心現量、不著外性、離於四句、見如實處、不墮自心現妄想二邊、撰所撰不可得、一切度量不見所成、愚於眞實不應撰受、棄捨彼已、得自覺聖法、知二無我、離二煩惱、淨除二障、永離二死、上々地如來地、如影幻等諸深三昧、離心意意識、說名涅槃。

(U105, 258-259; N184, 16 - N185, 6; T505a, 8-15)

「私の教えで涅槃と云われるものとは、次の通りである。すなわち、外の対象として現れているものは自心に外ならないことをよく理解しており、外の存在への執着がなく、絶対二律背反を表す四句の立場を離れており、もの本来の在り方への洞察があり、自心の現れを外のものとして分別する二邊に陥ることがなく、把握されるものと把握するものとを認めることがなく、知識を得るための手段の効用性を見ることなく、眞実への無知は受け入れられないもので斥けるべきものであり、自ら聖なる覚の眞理を証しており、二種の無我を証し、二種の煩惱を断じ、二種の障碍を

除き、二種の死を離れ、修行の段階を登って如来の段階において幻など、すべての自己集中をもって心と意と意識とが働きを止める。これこそ涅槃だと私は宣言する。」

100. *nanādhimuktikānaṃ sattvaṇāṃ dharmadeśanā kriyate citta-mano-manovijñāna-vyāvṛtṭy-artham mayā nyaiś ca tathāgatair arhadbhīṣ samyak sambuddhair na svapratyātmarāya-jñānādhigama-pratyavasthānāt sarva-dharmānirvāṣa-svacittadṛṣya-mātrāvabodhād dvivha-vikalpasya vyāvṛtṭitah /*

我及諸仏、為彼種々異解衆生而説諸法、令離心意意識故、不為得自覺聖智處。：於一切法無所有、覺自心現量、離一妄想。(L107, 277-8, N194, 16-20; T506c, 11-14)

「様々の氣質をもつ人々のために私も、そして他の覚者たちも、真理を説いて彼らが心と意と意識とから離れるように仕向ける。自覚聖智の証得の段取りを我々がつけるのではない。それは、彼らがすべて何かであるものがその虚妄な外観を離れており対象として現れている自心に外ならないことを覚えることを通して二の分別を離れることによって、自ら証するものである。」

101. *mama...sadasat-pakṣa-vigata utpāda-bhaṅga-virahito na bhāvo nābhāvo māyā-svapna-rūpa-vaicitrya-darśanavan nābhāvah / katham na bhāvo yaduta rūpa-svabhāva-lakṣaṇa-grahaṇābhāvād dṛṣyādṛṣyato grahaṇāgrahanataḥ / ata etasmāt karanāt sarva-bhāvā na bhāvā nābhāvāḥ / kim tu svacittadṛṣya-mātrāvabodhād vikalpasyāppravṛtṭeh svastho loko nīkṛtyah /*

我者離有無品、離生滅、非性非無性、如種々幻夢現故非無性。云何無性。謂色無自性相攝受、現不現故、攝不攝故。以是故、一切性無性非無性。但覺自心現量、妄想不生、安穩快樂、世事永息。

(L108, 284; N198, 16-199, 5; T507b, 6-11)

「私は有と無、生と滅の辺を離れており、私には有も無もない。無がないとは、幻と夢には様々の姿形が見られ

ること、有がないとは、姿形の自性のどのような特徴をも把握できないことである。見られているものは見られていないのであり。知覚されているものは知覚されていない。それゆえ、どの存在も存在でなく、また非存在でもない。それだけではなく、知覚の対象は自心の現れに外ならないと覚ることによってどのような分別意識も起らず、世間は落着いて無事である。」

102. *mayā tu ... na vikalpyate nityā vā 'nityā vā tī / tat kasya hetor yadūta bāhya-bhāvānabhvyupagamāt tribhava-cittamatrōpadeśād vicitra-laksana-pravṛtti-nivṛtti-mahābhūta-sanniveśa-viśeṣa-dhūta-bhautika-anupadeśād vikalpasya dvīdhā pravartate grāhya-grāhaka-laksanātā vikalpasya pravṛtti-dvaya-parijñānād bāhya-bhāvābhāva-dīpī-vigamāt svacitta-mātrāboddhād*

我法非起常無常*。所以者何。謂外性不決定故、惟說三有微心、不說種々相有生有滅、四大合會差別、四大及造色故、妄想二種事攝所攝、知二種妄想、離外性無性二種見、覺自心現量。

(L109, 300-301; N208, 12-17; T508c, 27 - 509a.3)

「私はしかし、常住とも無常とも分別しない。その理由を挙げる。外の存在というものを認めない私は、三有は心に外ならないと指摘する。私は様々な特徴が生じ滅するとか、物質構成要素の合成の区別とか、物質構成要素とそれらから成る物質とかということを主張しない。分別の二種の特徴として把握するものと把握される対象とが生じるが、分別のこの二様の起り方を徹底的に知ることを通して、外の存在と非存在という二様の見解を離れて、外の対象として見られているものが自心に外ならないことを覚っているから。」

* 「我法起非常非無常」を訂正。「起」は「一切外道皆起無常妄想」(T508, 10: "vikalpyate" L109, 294, 3; N204, 13) 「我法」は「一切外道有七種無常、非我法」(T508b, 12-13; "na tu mayā" L109, 295, 5; N204, 17) である。

105. *prathama-saptamyaṃ bhūmau bodhisattvo mahāsattvaḥ citra-mano-manovijñāna-mātram traidhātukam*

samanuपास्यति / ātmānīya-vigatam svacitta-vikalpōdbhavam na ca bhāya-bhava-lakṣaṇa-vaicitrya-patitam anyatra svacittam eva / dvīdhā bālānām grāhya-grāhaka-bhāvena pariṇāmya ajñānān na cāvabudhyanta anādikāla-daśhulīya-vikalpa-prapañca-vāsana-vāsitah //

初地乃至七地菩薩摩訶薩、觀三界心意意識量、離我我所、自妄想修墮外性種々相。愚夫二種自心撰所撰、向無知不覺無始過惡虛偽習氣所薰。(L110, 306; N212, 7-12; T509b, 47)

「菩薩は、第一地から第七地までに次のことを觀察する。すなわち、三界は心・意・意識に外ならず、自己と自己の所有とを離れており、自心から起るものであり、外のものの特徴の多様性に陥っていても自心以外の何ものでもなく、しかもそれを無智者が歪めて、把握されるものと把握するものとは変え、そのことを彼らは愚かにも無始時來の粗惡な分別の拵がりの習慣性のなかにあつて、覺らないでいるのだ」と。」

106. mā bodhisattvā mahāsattvāḥ svasāmānya-lakṣaṇānavabodhāt sapta-bhūmi-*[*kramānusamdhya-jakuśalās tīrthakara-kudrīṣṭi-mārge prapateyur ity ato bhūmi-krama-vyavasthā kriyate / na tu ...*]*tra kaścit pravartate vā nivartate vānyatra svacittādīya-mātram idaṃ yaduta bhūmi-kramānusamdhis traidhātuka-vicitra-upacāras ca / na ca bālā avabudhyante 'navabodhād bālānām bhūmi-kramānusamdhī-vyapadeśam traidhātuka-vicitrōpacāras ca vyavasthāpyate mayā cānyair buddhais cēti kathayanti [Bālāḥ] //

不令菩薩摩訶薩不覺自共相不善七地墮外道邪徑故、立地次第。∴彼實無有若生若滅、除自心現量、所謂地次第相統、及三界種々行、愚夫所不覺。愚夫及諸仏説地次第相統、及説三界種々行。

(L110, 308; N213, 8-15; T509b, 15-20)

「優れた菩薩が特殊な特徴と共通の特徴とを覺らずそのために七地の一連の段階に通曉せず非仏教者の誤った見解の道に陥ることがあつてはならないと考えるからこそ、私は修行の段階を区別するのである。しかしながら、∴實際

には何ものも生じ滅することがない、言い換えれば、一連の修行の段階も、そして三界の様々な手続きも、すべては自心がそのようなものとして見られるのに外ならない。このことを無智者は覺らない。このことを覺らないために彼らは、私と他の覺者たちが一連の修行の段階の名称と三界の様々な手続きとを決定するのだと信じる。」

117, 118, 119. lokottaramahā [pāramitā] punar ...svacittāśīya-vikalpa-māira-grahanāi svacitta-dhayaśvabodhād apravṛtter vikalpasya gatesūpādāna-grahanābhavāt svacitta-rūpa-lakṣaṇābhinveśād dana-pāramitā sarva-sattva-hita-sukhārtham ajāyate paramayoga-yoginām /

出世間上々波羅蜜者、覺自心現妄想量摂受、及自心二故、不生妄想、於諸趣摂受非分、自心色相不計著、為安樂一切衆生故、起上方便、生檀波羅蜜。

(U118, 343; N237, 11-15; T512c, 36)

「優れて出世間的な修行の完成とは、すなわち、外の世界として現れているものは自心の誤った分別に外ならないことを理解しており、また自心が二分されていることを覺っているので、どのような分別も起きない。そのために、生死の様々な在り方への執着に関わることがなく、従ってまた、自心に外ならない形のどのような特徴にも囚われることがない。そのために、最上の修行をする人たちに、あらゆる衆生に安樂を提供する目的で、与えるという修行の完成が生じる。」

120 (再). (梵・漢文略) (U118, 344; N238, 48; T512c, 11-13)

「そこにおいては自心を虚妄に分別することがなく、知力でもっていくら検討吟味していても二辺に陥ることがなく、依りどころの転換はその後失われることがなく、自内証の尊い在り方を達成する。それが智慧（般若）の修行の完成である。」

【三】『楞伽經』における「自心現」という用語の占める位置・役割

卷二初めに見られるように、自心現を確認することは、菩薩が優れた修行者であることの四条件の第一に挙げられることだが、第二、第三の条件、すなわち外の存在は存在ではないと観察すること、そして生住滅を固定して見る立場を離れること、は自心現を確認することと別のことではない。そしてこれら三条件を確認することを通して自覺聖智の証得を喜ぶという第四の条件が満たされ、意生身を得るとし、そしてこれが菩薩の第八地の境涯だというのだから、要するに菩薩の修行は自心現を確認することに尽きる、と言っている訳である。

卷三冒頭で、菩薩十地の初めに自心の現れを確認して三昧の樂という意生身を得、第八地で法の自性を覚って如幻三昧を得、そのあと如来と等しい無行作の意生身を得るとすることは、卷二で菩薩の修行の四条件を成就すると云われたことを敷衍したものである。

第八地の如幻三昧は、自心現の覚りの現成に外ならず、この覚りにおいて存在の存在性は「不生」であり、また形としては「無所有」すなわち無相、とされる。この「自心」は、何らかの自性として残るものではない (No. 20. "svacittam grāhya-varjitam" 「自心所撰離」、自心は捉えようがない)。これが般若波羅蜜の成就だと云われる所以である。また、この「自心現」の教えは、最上の修行をする人たちが一切の衆生に安樂を提供するものであることから、これは布施波羅蜜の現成だと云われる。

上に引用した用語例には含まれていない次の箇所では、五法、三自性、八識、二無我と並べて自心現が挙げられており、これが『楞伽經』独自の教えの表明であることが知られる。

113. pañcadharmasvabhāva-vijñāna-narīrmyadvaya-svacittatpśya-bāhyabhāva[abhāva]-anavabodhad vikalpat

pravartate bālanām na tv aryanām //

不覺彼五法自性識、二無我自心現外性、凡夫妄想、非諸賢聖。

(L113, 325-6; N225, 2-4; T510c, 24 - 511a, 2)

「現実の基本的な五つの特性、三つの自性、八つの識別力、二つの無我、そして自心が外の存在として現れる」であって、外の存在としての対象に存在性はない」ことを覚らないために、無智者には虚妄な分別が起きる。しかし聖者には、それはない。」

このようにして我々は、「自心現」の語が『楞伽經』独自の重要な役割を果たしており、そこでの中心的な位置を占める教えとして提起されていることを知るのである。

「結び」『楞伽經』がアーラヤ識を「自心」とし、これが対象として「現」われ、それを他として捉える七識の傾向性に無始時來の無知の源を見、七識を絶対視する現実の人間の在り方の究極的な批判を示す。それと同時にその批判は、批判の主体である「自覚」聖智の自他を絶する働きの絶対現性を示す。八識の第八、アーラヤ識は、箇別化以前の、いわば時間・空間の原点という意味で人間の原初形態とでもいべき在り方を表す用語であるので、『楞伽經』の「自心現」の思想は、人間におけるそのような、不覺から覺への転換と、覺の絶対現性をとを指示するという意味での、根源的な意義をもつ教えとして位置づけられる。

一一 『慧可語録』と「自心現」

私が『慧可語録』と呼ぶものは、柳田聖山氏『達摩の語録』所収のいわゆる『二入四行論』テキストの七十四（のちに改めて七十五）則、椎名宏雄氏ご紹介の、朝鮮国李朝天順八年1464年刊行の天順本『菩提達摩四行論』（駒

澤大学佛教學部研究紀要第54号、平成8年3月、197～214ページ）でその七十五則の後に来ることが知られた十八則（田中良昭氏『敦煌禪宗文献の研究第二』大東出版社、平成21年、所収の、天順本末尾六則の訓読参照）を合せて作成した全九十三則のテキスト、のことである。

このテキストは、慧可と道育とが西來の法師から大乘安心の道、理入・行人の教えをうけたことの曇林による記録で始まるが、その後、第五十則までの大部分は、問に答える人の名が挙げられていない。私はこの答者を慧可と見る。この後、終わりまでに慧可の則と見られる八則以外は「三藏法師」の名が数回挙げられる他は、別の禪師、法師たちの名が記されている。經典研究者、訳経筆受者であった曇林は、北周武帝の建徳年間の廢仏の期間（574～7）に慧可と出会い、そのとき初めて慧可の師のことや同学のことを知ったわけで、北周の廢仏という国家的な態勢は、在野の二人の出家者、曇林と慧可、そして慧可の同学たちを含む人々に、護法のための必死の結束をもたらした。このテキストはその結末の成果と考えられる。その結末の中心に慧可がいたことを考えて、私はこのテキストを基本的に『慧可語録』と呼んでよいと思う。『統高僧伝』卷十六「僧可伝」に慧可は、当時鄴にあつて『勝鬘經』を講じその文義を制作していた曇林と合流したが、そのあと慧可と曇林とは、相次いで賊に片臂を斬りとられながらお互いを支え合つた、とされる。

『慧可語録』には、「自心現」あるいはそれに近い表現が約14回見られる。柳田氏の丹念な注記によつて『維摩經』「中論」「肇論」など様々な引用源が知られ、それらと比べて、『楞伽經』から引用する「自心現」の語が占める比率は必ずしも高くない。しかし、『楞伽經』の「自心現」の語の用例と対比してみると、それらの引用は、慧可を中心とする禪者たちの『楞伽經』への実践的な関心と志向とを表明することの、他に類例を見ない有力な証拠となっている。その『慧可語録』に見られる「自心現」の用例を拾ってみると、次のようである。

「但有心分別計校、自心現量者、皆悉是夢。」（椎名氏2011ページ）

「自心現量、不知境界從自心起。」「自心現量者、身何故惑心。」「自心現量、自心化作有、自心化作无、還被惑。」(203 ページ)

「不了自心現境界、名為波浪心。」(209 ページ)

「所有見処、皆是自心現妄想。」(213 ページ)

このうち「自心現量」は明らかに四卷本からの引用であるが、他に、「四種仏説法」に挙げる「報仏」は菩提流支訳の十卷本に依るものである。「真如」も『十地経論』と『楞伽経』とに見られる菩提流支の訳語である。四卷本は「如如」とする。この語録中に『楞伽経』への言及は少ないが、慧可とその同学たちがこの経をかこれらの修行の助けにしていたことは間違いない。菩提流支の魏訳十卷本は、それが依拠した梵本のテキストが余りにも乱れており、その乱れを修正すべく解説めいた訳文になっている。そのために、四卷本を重視した慧可は、「名と相」とに囚われた十卷本のテキストが世に珍重され修行の妨げになっていることを歎いた、と考えられる。『統高僧伝』慧可の項にいう、「この経は四世の後、変じて名相となれり。一に何ぞ悲しからずや。」

〔「何可悲」の「可」を「不」に訂正〕

「四世」とは、513年に十卷本が訳出された北魏、宣武帝の世から遡って、南朝の宋都、建康で四卷本が訳出されたときの北魏の世祖・太武帝、次の高宗・文成帝、顕祖・献文帝、そして高祖・孝文帝の過去四代を指すことになる。慧可は『楞伽経』流通の行く末をではなく現実の状況を歎いた、と考えるべきである。

なお、曇林が記録した慧可と道育との師の言葉の「二人四行」のうち「行人」は、シャーンティデーヴァの『入菩提行論』Bodhicaryāvatāra という題名を思わせる語(チャリヤー・アヴァターラ)である。『楞伽経』の経名は「ランカー・アヴァターラ」(アヴァターラには降臨の意の他に、悟入の意がある)である。「理人」に相当する語は「理」と「入」とを共に意味する「ナヤ naya (= leading, principle, reason)」一語でよいように思われるが、「宗通」を意味

する「シッターンタ・ナヤ (Siddhanta-naya)」でもよい。

「二入四行」が、慧可が曇林に伝えたインド人法師の教えであることに間違いはない。「壁観」は、七識の立場からは壁等の障害物と考えられるものが自心現に他ならないことを覚った、いわば壁が自心の、「意生身」に相当する立場、の独自の表明と考えられる。

曇林が法師の名を残さなかったのは何故か。曇林は北魏、東魏において政治権力者たちが財を傾けて支持した三蔵法師たちの訳経に筆受として参加し、インド僧たちの名に精通していた仏教学者である。ブツダシャーントラ訳『撰大乘論』(531年)、ガウタマ・ブラジュニヤールチ(瞿曇般若流支)訳出の11の経、論(539、540、542、543年)、そしてヴィモークシャ・ブラジュニヤールシ(毘目智仙)がガウタマ・ブラジュニヤールチに助けられて訳出した竜樹の『廻諍論』、世親の『業成就論』、その他に筆受として参加したことが訳経の直前または直後に掲げられた記録に記されている。慧可から「二入四行」の教えを聞き出した曇林がその法師の名を聞かなかつたはずがない。しかし、二人は敢て法師の名を伏せたのではないか。後に『統高僧伝』が「達摩滅化洛浜」とする「達摩」の名は、曇林と慧可の知らないところだが、二人は何らかの理由で、師の名を、理行の体現者・紹介者という意味で、法師、あるいは、三蔵法師、で終始することに合意した、と考えたい。(2012年8月12日)

【二】『慧可語録』と「自心現」、補足2点

(一)「自心現量」の語を柳田氏が『達摩の語録』で「自心現量じしんげんりやうする」と読み、これを「自己の心が外界を現出し、分別すること」と説明しておられるのをかねてから不審に思っていたところ、最近、東京大学「インド哲学仏教学研究」18号、2011年3月、の柳幹康氏の論文「『楞伽經』と『二入四行論』——『楞伽宗』の思想とそこに占める『楞伽經』の位置——」で、「量」の字が「唯」ではなく計量の意味で理解されていたらしいと指摘されている(77)

79ページ)のを拝見し、柳田氏の読みが語録の主人公の理解に適っていたことを知った。また同時に、結論かと思われていた表現を「如是解者、亦名為妄想」として否定し去る奇妙な言い方が語録中に少なからず見られる理由も、よく分かった。「自心現量」の「量」は、果てしなく計量し推量する分析の過程が行き詰まって、トドのつまり「こればかり」「これだけ」、と、計量が終止し、分別を離れる、覺りを意味する原梵語「マートラ」の訳語であることが、初期の禪者たちには理解されていなかったことが知られる。研究者でない修行者には、これは無理もないことである。柳田氏が、語注で前後の文脈から、「自心現量にすぎぬのを知る」(『達摩の語録』83ページ)と、正確に近い理解を示しておられるが、同じことは初期の禪者にもあり得たと思われる。

(2) 慧可と道育とが師事した法師の名を曇林が書き記さなかった理由を私は、研究発表の後日、法師が生前、弟子たちに、名や相に囚われるな、と教え、自分のことも、わしは無名の法師だ、と云い続けて、死闘を繰り返す政治権力者に近づかず、最後まで民間の真摯な修行者に法師として接することに徹したからに違いない、と思いついた。